

## 川は様々多けれど―〈名取川〉の形成

田口和夫

この程、縁あって伊勢内宮に詣でた。平成二十五年が遷宮とのことで、その準備が始まり、まもなく鎮地祭が行われるときであった。昔、内宮・外宮を巡ったことはあったのだが、五十鈴川の辺に立ってみると、音高く流れる澄んだ流れがあらためて昔の記憶を蘇らせたことであつた。

### 川尽くしの謡

五十鈴川は一名「御裳濯川」、〈名取川〉の川尽くしの謡の冒頭は「川は様々多けれど、伊勢の国にては、天照大神の住み給ふ、御裳濯川もありやな」（和泉流）で始まる。次の、熊野の音無川とともに壺験所を連ねたのである。そして能（野宮）にも「ゆくへも鈴鹿川、八十瀬の波に濡れぬれず」と謡われる鈴鹿川となる。「光源氏のいにしへ、八十瀬の川とながめける、鈴鹿川を」、ここまでは所在順に関わりなく、有名な川の名を連ねたと見えるのだが、「鈴鹿川を打ち渡り、近江路にかかれば」として、「野洲・墨俣・足近・杭瀬川」と続くと、実際の旅路、〈名取川〉の僧が辿る

道筋を意識しているように見える。鈴鹿川が近江路よりも都側にあるような表現になっているのは、源氏物語賢木の巻とそれに取材した〈野宮〉における、伊勢に下る齋宮と御息所の一行についての描写を念頭に置いているからと思われる。「賢木」における「鈴鹿川八十瀬の波」の表現を含む源氏と御息所との贈答歌は、一行が伊勢に下るときのものであるが、まず都の中、二条院の前で、源氏の振り捨てて今日行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖は濡れじや

があり、それに対する御息所の返歌は、逢坂の関を越えた所（即ち近江路の前）からで、鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢までたれか思ひおこせむ

となる。一行が京中から逢坂の関を越えるまでに行われたこの贈答と、「鈴鹿川を打ち渡り、近江路にかかれば」という表現は関連があると考えるのである。

〈名取川〉の謡は、次に神奈川県「片瀬川」、福島県の「阿武隈川」となる。宮城県名取市を

流れる名取川への順路として、これらの名所を挙げることは、穏当と言えよう。

思ふ人によそへて、あふくま川も恋しや、つらきにつけて悔しきは、藍染川なりけり、墨染めの衣川、ころもの袖を浸して

ここは順路を離れて、言葉の縁で仕立てられる。「思ふ」、「会ふ」。「逢ひ初め」、「恋し」、「つらし」、「悔し」は恋の縁語である。後に見るように「名取川」が恋歌から定着した歌枕であることを思えば、この川尽くしが恋の色に染め上げられているのも当然なのだが、僧の狂言においては、やや違和感があると言えようか。「藍染め」から「墨染め」の衣となり、「衣の袖を浸して」名を掬う所作へと繋げる。和歌的な言葉をつなげた表現である。このような物尽くしは、早歌（宴曲）に特徴的な趣向で、外村久江・南都子氏の『早歌全詞集』（三弥井書店）を見ると、山・草などは当然あるが、不思議なことには川（河）尽くしはない。冷泉羽林作・明空調曲の「名取河恋」という曲は宴曲集中にあるが、「思はじよしなしとても又、さもあやにくなる名取川、瀬々の埋木あらはれば、其も我身の心から」と、終曲部分に「名取川」が登場するだけで、川尽くしではない。この狂言の川尽くしは、早歌にあつてもよいような和歌的教養に裏打ちされた表現を持っているのである。

### 歌枕名取川

陸奥の名取川が歌枕として有名になるのは、古今集の恋歌にその言葉が登場すること

によつてであろう。まず六二八番壬生忠岑の歌、

陸奥にありといふなる名取川無き名取りて  
は苦しかりけり

次に六五〇番詠人知らずの歌

名取川瀬々の埋れ木あらはればいかにせん  
とか相見そめけん

続いて大和物語(平仲物語にも)に

さ夜中にうき名取川渡るらん(平仲物語渡  
るとて)濡れにし袖に時雨さへ降る

があり、名取川の縁語として「うき名」「濡れ  
にし袖」などの表現が定着してることが分  
かる。太平記巻二「三人僧徒関東下向事」にも、  
陸奥に流された円観上人の

陸奥ノウキ名取川流来テ沈ミヤ果テン瀬々  
ノ埋木

がある。閑吟集五八番に「あはでうき名の名  
取川」とあるのは当然このような歌枕の伝統  
に基づくものであり、狂言の川尽くしへの導  
入となる歌「我はまた恋をする身にあらねど  
もうき名を流す腹立ちや」もまたその系譜に  
ある。

## 大児と小児

比叡山で僧は稚児に出会い、名を付けても  
らう。和泉流の最古本天理本では「一ちこの  
寺」へ参り、その一人の「おちごさま」に「き  
たい坊・ふしやう坊」の二つの名を付けても  
らう。大蔵流虎明本では「あるお寺」で「いか  
にもうつくしひ大児と小児と、手習をなされ  
て」いるところへ行き、大児・小児にそれぞれ

れ名を付けてもらう。今は和泉流でも二人の  
稚児に名を付けてもらうことになっている  
が、これは江戸中期の波形本に「去る寺へま  
いつてござれば大児と小児の手習をして」と  
大蔵流に影響を受けた演出を記してからの事  
である。その方が中世稚児物語的な雰囲気  
漂うので、二人の児の形が定着したものであ  
ろう。ただし、近世の漸本では、このような  
大児・小児が登場すると必ず食欲に関する笑  
話になってしまう。この狂言でも、あやしい  
法名を付けるということは、笑話の方向に傾  
いていることになろう。鷺流の保教本の注記  
には

大倉京流杯ニハ左右ノ袖ニ書付テ下サレタト  
斗云テハ道理悪シ、則ニツノ名ヲカイテ袖ニ  
張付テト云ハ吉、大方ハ只書付テト斗云

と言う。なるほど墨染めの衣の袖に墨で書付  
けたのでは読めないのである。伝右衛門保教  
という役者はこのような事まで気になる人  
であつた。

## 名を忘れる昔話

川を渡り損じて深みにはまる、そこへ現地  
の名を持つ有力者が登場するという設定は狂  
言(人間川)と同想である。(名取川)としての  
独自趣向は、和歌の比喩的表現と違つて、文  
字通り自分の「名を流す」事にある。(名取川)  
の基盤には和歌的教養に根ざした発想がある  
のだが、同時に、ばか聾が川を渡るときに名  
を忘れるという昔話の型が狂言としてのプロ  
ットを作っていることに注目しておくべきで

あろう。関敬吾氏『日本昔話大成』では笑話・  
愚人譚に分類される「団子聾・買物の名・酢  
あえ・素麺と鬼面」の類がそれである。代表  
的な団子聾の型は、

愚か聾(息子)が舅の家で団子をごちそうに  
なる。「団子団子」といつて帰る。川を飛び  
越すときに「どっこいしょ」といいかえる。  
家に帰って「どっこいしょ」をつくれという  
が、女房(母親)がわからないので怒つてた  
たく。「団子のような瘤ができた」といつた  
ので思い出す。

というものである。関氏は同型として朝鮮の  
昔話「蜜小鉢」を引いている。

(一)ばか聾が嫁の実家を訪れて蜜をごちそ  
うになつた。(二)ことてもおいしいので名前  
を聞くと、蜜小鉢だと教えてくれた。(三)  
彼は川を渡るときに名前を忘れてしまった。  
彼は川の中で忘れ物をさがしていた。(四)  
通りかかった人が、彼の言動がばかばかし  
いので「目玉はまるで蜜小鉢のようだ」とい  
つた。それで再び思い出して家に帰つた。

(三)「川の中で探す」こと、(四)「通りか  
かった人」が教えること、などの要素は、日  
本のどの昔話よりも狂言(名取川)に近いと言  
えよう。日本にもまた、ここまで完備した型  
の昔話があつた筈である。それが狂言(名取  
川)の基礎になつたと言つてよいと思われる。

(たぐち・かずお 文教大学名誉教授)